



イケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 516 回 もはや幻想か？「飲みニケーション」

2013.3.17

「宅ふあいる便」でお馴染みの株式会社エルネットが実施した「職場の飲み会に対するアンケート」調査がある。それによると職場の飲み会は、楽しいコミュニケーションの場というよりは、「仕事の延長線上」…という捉え方の人が回答者の 4 割だった。

どうも、職場の飲み会は人気がない。「最近の若い社員は酒を飲まなくなった」という中高年社員の嘆きをよく聞くようになった。終業後に一杯誘っても平然と断るし、部署全体の宴会も嫌がる若手社員が増えて中止に追い込まれた、という話も少なくない。

会社が飲み代まで負担し、上司は、「若い人達の、リフレッシュのために」と勘違いしている職場の飲み会、会社における「飲みニケーション」が、イマイチ機能していないようである。

彼らの立場になり代わり、彼らの代弁を試みよう。

一番大きな理由は、勤務時間外に拘束されたくないという事、仕事の延長線上はごめん…ということだ。それと、別に飲み会でなくとも、仕事上でのコミュニケーションは取れると思っている。飲み会がコミュニケーションを円滑にする最上の方法とはどうしても思えない。

理論的に「飲み会は不要」、ビジネス上の合理性を考えれば、自明の事実である。

昔から「酒の効用」といわれてきたことがある。それは、①仲間との連帯感を深められる、②自分を忘れてバカになれる、③ストレスを発散してリフレッシュできる…の 3 つである。

「飲み会不要論」の根底は、若者に、この「3大効用」が利かなくなったことに起因する。

①は携帯電話やメールの普及で人間関係が広く浅くなったこと、コミュニケーションの手段が大きく変わったことが背景にある。②はネット仮想空間の発達で、酒の力を借りなくてもバカになれるようになったことが理由。逆に今は、酔っ払うことが格好悪いという意識も強まり、カフェなどで、お酒を飲まずに人と話をするようになっていく。③は、根が深い。酒を飲んで日ごろの留飲を下げられるのは、経済が右肩上がりの年功序列社会で、『今を耐えれば将来は良いことがある』と思えたからだ。それがもはや通用しない。こうなれば会社などのタテ社会のストレスに耐える気もなくなる。男のタテ社会にいと、『まあまあ、飲め』と勧められて経験を積み、ビールの苦みもうまく感じるようになる。でも今の多くの若い人たちはタテ社会に組み込まれるのを避けがち。女性が主導権を握るヨコ社会に心地よさを感じる。自然と口に優しい甘い酒の方に人気が集まる。

つまるところ、酒を飲んだところでストレスは解消されず、リフレッシュにもならない。

今どきの若い奴らが、飲み会に行かなくなった理由が、こんなにあった。なるほど、会社の飲み会が盛り上がらないわけである。「居酒屋の青春」とばかり「飲みニケーション」に期待している上司、よくよく見ると、もうそのシーン、幻想の世界になってしまった。